

# 学問とは何か

阿部 謹也

「学問とは何か」という大変大きなテーマで、お話をするんですが、副題には、ここに挙げておりませんが、「世間」の中でいかに生きるか、ということを考えております。実はこちらのほうが、主題とも言ってよいものなのです。私は長いこと、ヨーロッパ史、特に中世史の勉強をしてきまして、その中世史の勉強の中で、日本の社会というものを改めて発見するというようなことがあったわけです。その中で、さきほどの先生のお話にもございましたが、やはり、明治以降、特に日清・日露以降、個の自覚ということがありました。実は私は昨年教学研究所で、同朋会の「家の宗教から個の自覚へ」というテーマに即して、世間の中における個の自覚の問題について、ちよつとお話ししたことがあります。今日はその話は重ねて致しませんが、ヨーロッパにおける学問が、客観的に正しいものだという意識が、日本には今でもありません。そして、その学問意識と言いますか、学問観念に乗っかって、あらゆることが論じられていくという状況に今あるわけです。つまり、小学校以来皆さんも、学問については学んできていると思いますが、その日本における、明治以降の学問の概念です。先ほど、明治以降、自己の個の自覚というものが生まれてきた、というお話がございました。しかし、それ以前の日本人には個の自覚がなかったのか、と考えてみますと、そんなはずはないです。もちろん、明治以降の個の自覚と、明治以前の個の自覚とは違うと思います。違うとは思いますが、最

初から脱線して少し余計なことを申しますと、ヨーロッパ、というよりロシア、実は正確に言えばソ連ですが、ある学者がいました、カーメンスキーという人です。この人は、個人というものがどのようにして生まれてきたのかということを論じている論文の中で、絵画、特に風景画というものが、個の自覚が無いところには生まれません。個人というものが生まれませんところには、風景画が生まれませんと言っているんです。ヨーロッパで風景画が生まれてきたのは十七世紀以降です。日本ではどうかと言うと、これはなかなか大きなテーマになってしまいます。日本では風景画は、絵としてはもちろん後になります、短歌としては、山部赤人のあたり、あるいはもつと前から富士を歌ったりしている短歌がたくさんあるわけです。万葉集の中にいっぱいあるわけです。それではあそこに歌われている歌は個人の歌ではないのか、ということになると、大問題になります。つまり日本人の場合は、短歌を通じて個というものが表現されていると言えるとすると、カーメンスキーの個が無いところには風景画が生まれません、風景の描写がない、という論説はかなり正しい面をもっていることになります。そのような問題とも繋がってきます。

今日はそういう問題に深入りはしませんが、そのような問題があるということ的前提として、ちょっと最初におきたいと思えます。ヨーロッパでおこった学問が、現在においても、日本で唯一の正しい学問であるかのような意識がどこにでもあつた。特に大学というところが、それを宣伝してきたんです。これは大学にいる者の責任ですが、明治以降の日本の大学は、ヨーロッパの学問を、実践し、宣伝するために作られたと言つてもいいんです。つまり、具体的に言えば、殖産興業、あるいは富国強兵政策というもので、日本の軍事力、あるいは産業の力を強めるために、国が作るうとしたんです。それが帝国大学です。その後、様々な学問が生まれてきて、今日に至っている。ですから当然、政策的に作られたものなんです、その学問というものが、今の一人一人の日本人にとって、果たして本当に必要なものなのかどうか問題なんです。学問という言葉は、ドイツ語ではヴィッセンシャフト (Wissenschaft) と言います。Wissenschaft という言葉は、日本語に訳すと「学問」になつてしまふ。ところが日

本語で「学問」と言うと、「学問」とは何ですかと聞かれても、ぱっと答えられない。おそらく、正しい知識、正確な知識、ぐらいいのところだと思ふのですが、ドイツ語の *Wissenschaft* はそうではないんです。 *Wissen* という言葉は「知識」ですが、 *schaff* という言葉がついているということは、集合名詞なんです。つまり、色々な学問が集まって学問になっているということなんです。どういうことかというところ、複合語なんです。要するに、様々な学問が融合されて、宇宙のすべてを解明するために学問がある、ということなんです。ですから日本では、例えば、皆さんが大学生の時、あるいはこれから勉強しようとする時に、何をやるうかと考える、文学部にいこうか、あるいはどこにいかうかと考える時に、それぞれの学問を頭に置いておくとおもうんです。そのような学問は、ヨーロッパからきた学問で、例えば、工学やるうとか、あるいは物理学やるうとか、医学やるうとか、これはヨーロッパでは全部一つなんです。

私が初めてドイツに行ったのは一九六九年ですが、その十年くらい前から、ドイツのある学会のメンバーになっていたというか、されてしまっていたのです。それで、ドイツに行った時に、私などは当然、東アジアからきた全くヨーロッパと縁もない異貌異相の人間として、決してまともな扱いは受けまいだろうと思つて行つたのですが、とんでもない違いがあつたわけです。どういうことかと言うと、その学会仲間だけでなく、ドイツの社会自体がプロフェッサーを、それなりにもう立派な地位があるものとしておもうんです。私は最初はドイツ語の勉強のために、イザローン (*Isarohn*) という小さな街で、ドイツ語講義を二か月受けたんです。そうしたら、そのイザローンに、ヴェスト・ファアレン・ポストという新聞の記者がやつてきて、そこで勉強している人間の記事を書きたいと言つて、私の写真を撮つていった。そこにはプロフェッサーと書いてあつたんです。私がまだ三十いくつの若い時です。そうしたらその次の朝、散歩しようと思つて街へ出ると、街中の人が皆私に向かつて、「おはようございます、プロフェッサー」と挨拶する。そこは小さな街ですが、そこでも、学問をする人が、何かちょっと変わったことをやっている人という意味ではないんです。日本ではそのような意味合いがあります。学問をやつていますと言うと、何か変わった

ことをやっている、お金にもならないことをやっている人、という印象がありますが、そうではないんです。自分たちに代わって世界の秘密を解明してくれる人、という意味なんです。ですから、建築学も文学も物理学も皆一つの学問で、日本みたいに、理科系、文科系という分け方はない。これは日本だけです。理科系の人間、文科系の人間と平気で言う、そういう言葉は日本でしか言わないんです。例えば、MITと言っているマサチューセッツ工科大学があります。ここは理科系の牙城みたいに言われていますが、そうではないんです。ノーベル経済学賞をとった人が何人もいる大学です。そのような学問の根本的理解が違うということも前提にしなければいけないわけです。本当は、今日は歴史学が何か、という話をしようと思ったのですが、歴史学という学問も、様々にある多様な学問の一つに過ぎないので、歴史学とは何かという話から始めますと、近代になって生まれた非常に狭い分野の話をすることになってしまいます。それはやめまして、学問とは何かという内容の話にしたいんです。ですから最初は、ヨーロッパでの学問つまり、すべてを総合して宇宙の解明をする学問が、どのようにしてできたかということ、そして、それが近代になつてどのようにして変わっていったか、そのへんはあまり詳しくお話しする時間は無いと思います。ただ、十二世紀あたりからそのような学問は生まれてきて、それは今でも、評価に値する学問だということをお話しておきたい。

十二世紀に、サン＝ヴィクトルのフーゴー(Hugo)という人がいました。サン＝ヴィクトルというのは、パリの近くです。フーゴーはドイツ生まれですが、あの頃はドイツという国はなかったわけで、まだ一つの地域に過ぎなかったんです。この人は『ディダスカリコン』(Didaskalicon)という本を書いた。『ディダスカリコン』というのは、学問論と言うか、読解論と言うか、書評論と言うか、そのような本で、世界最初の学問論と言ってもいいんです。この本の中で、学問というのは、人生における最高の慰めだと言っているんです。知恵の研究、知恵を研究することが最高の慰めで、知恵の研究とは何かというと、まず哲学だと言うんです。哲学というものは、すべての人間的、あるいは神的事物の根拠を徹底的に探求する学問だからだと言っています。その哲学を、ざっと見ていきますと、名前を挙げ

るだけですからちよつと面倒なんですが、哲学は思弁学と実践学と人工人造学と論理学から成り立っている。つまり、四つの学問から哲学が成り立っていると言ふんです。まず思弁学とは何かと言ふと、神学、神様の学問ですね、それから数学、自然学から成り立っている。そして、実践学は個人の実践、一人一人の人間が如何に生きるべきかという実践、家庭がどうあるべきかという実践、それから公共の実践から成り立っている。個人の実践というものを考える、倫理学、道徳学から成り立っている。家庭の実践とは何かというと、家政学、家の政治と書くんですが、実はこれは経済学と同じです。家政学というのは、もともとと経済学の出発点です。ギリシャ語のオイコス (oikos) というのは「家」ですが、そのオイコスの学問が経済学だったんです。そして、公共の実践は、財政学と国政学、国の制度です。そして、人工人造学には、機織りとか兵器とかの商業、それから農業、狩猟、医学、演劇。兵器はさらに建築と鍛冶、農業は食量調達と肉やパンの製造、それも入っているのです。さらに、医学は要因と施術の二つの要素から成り立っていて、演劇は娯楽と史実から成り立っている。数学は算数と音楽、幾何、天文学から成り立っていて、音楽はさらに、天上の音楽と、人間の音楽と、器楽から成り立っている。論理学は、文法学と臨床理論から成り立っている。十二世紀です。十二世紀にすでにそういう学問の分野があつたと言われている。そのようなことを言い出すと、きりがありませんが、アレキサンドリア図書館という話を聞いたことがあると思いますが、あの時代にすでに、学問の分類があつた。アレキサンドリア図書館の分類というのは、今言つたような分類で、すでにできていたんです。

十二世紀という時代は、そのような意味での学問ができあがってくる時期なんです。フーゴーは、このような学問の基礎に哲学があると言っているんです。そこで問題は哲学です。哲学とは何か、フーゴーは非常に簡単に、まず謙虚な精神をもっていることが、哲学をする人間には必要と言います。これは日本でも言われています。その謙虚な精神と、さらに探求の熱意、ものを調べようとする熱意、さらに静かな生活、それに黙々とした吟味、さらに貧しさ、要するに貧乏じゃないといけないと言っているんです。この五つはまだ理解できるんです。最後に彼は異国の地と言つ

てるんです。学問をする、哲学する人間に一番必要なものは、謙虚な精神と探求の熱意、静かな生活と黙々とした吟味、貧しさの他に、異国の地と言ってるんです。異国の地とは何か。これは日本人には理解しにくい。どう説明しても理解しないと思うんです。そこで少し敷衍してお話することになると思います。学者、あるいは哲学する人間にとって、何故異国の地が必要なのかというと、彼は別のところで、全世界は哲学する者にとって、流謫の地でなければならぬと言ってるんです。流謫の地とは、自分の国以外の外国にいるということです。例えば、亡命しているとかです。要するに自分の国から逃れて他の国へ行き、そこで暮らすという、実に不便な、しかも不安な暮らしです。流謫の地について、フーゴーは次のように言ってるんです。祖国、自分の生まれた国が甘美だと思ふ人は、未だ脆弱な人に過ぎない、か弱い人間に過ぎない。しかし、すべての地が祖国であると思ふ人は、もうすでに力強い人である。しかし、本当に完全な人は、全世界が流謫の地であると思ふ人だ、彼はこう言ってるんです。

第一の人は世界に愛を固定している、つまり自分の祖国に愛を固定している。日本人なんかは、この言葉を聞けばすぐわかる。日本が一番良い、我々はここに在る限り安全だ、と思ってる。日本という国は本当に良いと思ってる人は多いです。非常に多い、特に外国に行つて帰つてくるとそう思うわけです。私はちよつと違ふんです。どうしてかと言うと、例えば、ヨーロッパへ行つて一、二年暮らして帰つてくる。そして、成田か羽田か、とにかく空港に着くとします。そこではエンドレスでテープを繰り返している。新幹線もそうです。今日も品川の駅のトイレで、右側は男子トイレ、左側は女子トイレとえんえんと繰り返している。そのような国に帰つてきた時に、「ああ、日本に帰つてきてしまったか」と思つてしまうわけです。ヨーロッパの喫茶店でもレストランでも、音楽は一切鳴らしませんから、うるさくなく静かにお茶が飲めるんです。日本はどこでも音楽を鳴らしている。私の場合はこのような意味で違ふんです。いずれにしても、第一の人は世界に愛を固定している。ほとんどの日本人はそうです。第二の人は世界に愛を分散させている。どこ行つたつて祖国だ、こういう人も少数います。日本人にも少しはいます。どこ行つた

としても暮らしていけると思っている人は少しはいます。しかし、第三の人、つまり、世界中どこにも祖国なんて無  
いという人は、少しオーバーかも知れませんが、日本人には一人もいないと思います。例えば、私の息子は、カトリ  
ックの修道院の附属の幼稚園に通っていたんです。その園長先生は、ドイツからきた修道女で、もう五十年も日本  
にいる。もちろん家族も向こうにいるんですが、帰らないんです。帰るということをしないんです。一生ここに  
というふうに決めて来ている。それでなんの不思議もない。もちろん日本語も上手になってきているし、帰らない。  
ところが、ほとんどの日本人は、日本で何か名をなして、ヤンキースの球団に入ったり、あるいは、どこかで会社を  
興しても、必ず日本に帰ってくる。日本に帰ってきて、何かをしたいと思っている。もう日本と縁が無いというよう  
な人は小野田さんぐらいなものです。小野田寛郎さんという人のことを憶えていると思いますが、彼は元々フィリ  
ピンでそのような暮らし、流謫の暮らしをした。そのような経験をしたから、日本に帰ってくるのが嫌なんだろうと思  
います。そのような人達は、ブラジルですつと暮らしているようですが、日本にはそういう人がいないんです。つま  
り、哲学をする条件が日本には無いということなんです。全く無いにも関わらず、哲学という講座は日本中にあるわ  
けです。それはどうやってやっているのかということになるわけです。

そこで、フーゴーが生きていた時代に、ヨーロッパで近代的学問の萌芽が生まれてきたということを、少しお話し  
ておかなければいけないんです。大体一〇〇年から一一五〇年の間に、シャルトル学派という学派が生まれたん  
です。シャルトルというのはフランスの小さな街ですが、この街、教会があるんですが、その街を中心として生まれた  
学派なんです。この時代は十二世紀のルネサンス、時代区分で十二世紀ルネサンスという言葉があるんですが、これ  
はいわば人間の理性によって得られる真理と、神の啓示によって得られる真理との、確執を説明しようとした時代で  
す。つまり、それ以前はキリスト教の世界で、当然その時もキリスト教世界ですから、真実というものは、神の啓示  
が無ければ、明らかにならない、と言われていたのです。それがシャルトル学派になって初めて、科学的真理という

ものは、聖書とは別にあるんだ、ということを言い始めた。それが近代的学問の生まれ、萌芽なんです。例えば、その頃にはシャルトルのベルナル（Bernard）という人が有名な人です。それからアラブの学問、ユダヤ教やキリスト教の様々な学者も生まれている時代です。そのベルナルの弟、ティエリー（Thierry）という人も学者です。この人は聖書の『創世記』の記述を、超自然的な力に訴えないで、自然の原因究明の手続きによって解明しようとしているんです。例えば、聖書の『創世記』に、神様が創った地球について、上の水と下の水を分け、というように書かれているんです。この上の水と下の水というのが、何のことかわからなかった。聖書を研究している人が皆昔から疑問に思っていたんです。神は大空を創って、大空の上の水と下の水を分けられたとある、何のことかわからなかった部分について、ティエリーは、次のように説明したんです。火が熱を与える力によって空気を暖め、その空気が蒸発して上に昇り、大空の上の水となる。つまり、方法は素朴ですが、水が蒸発して雲になる、あれが上の水だ、そして、下の水は地上にある水だと言ったんです。こうして、シャルトル学派によって奇跡から宇宙を解き放って、物理学の理論を神学から解き放つ出発点が生まれた。それと同時に、創世神話が部分的にしても、科学によって裏付けられるといった事態が生じたんです。

それ以後の話はここですと大変ですからしませんが、要するにそれが出発点となつて、その後ニコラス・クサーヌス、ガリレオ、デカルト、ニュートンという近代的な学者、学問が生まれてくるんです。ガリレオが測定術を作つて、発見して、空間と時間、因果関係も測定可能になった。つまり、測るということが、学問にとつて一番大事なんです。自然科学だけではなく、何かを測るということが、学問のすべての根底にあるわけで、測定技術が不十分だったら、近代的学問は生まれません。例えば、フット（Foot）という言葉があります。今でもフット、フィート（Feet）と言いますが、これは足の歩幅です。つまり、足の長さで測っている。もちろんエルレ（Ell）というのもありまして、エルレは肘の長さです。民族によつてはそれをどんどん細かくしていつて、関節を分けて、第一関節を曲



げたこの間の長さとか、第二関節の間の長さとか、細かく分けていることもあり。いずれにしても、世界どこでも、人間の測定術の基礎は人体にあるんです。空に星の数はたくさんあるということを、「無数にある」と言いますが、無数ではないと思います。いずれ数えられると思いますが、ジャワ島とかあの辺では、髪の毛の数ほどあると書いている。髪の毛の数も数えられないからという意味なんでしょうけど、中世の測定技術というのは、せいぜいその程度の測定術だったわけですよ。そのガリレオが測定術を発見して、空間と時間とか、因果関係も測定可能になった。これは難しいことです。今でも因果関係を測定するというのは、すごい難しいことです。

この前、韓国のMBCというテレビ会社がやってきて、南京大虐殺というものが問題になっているけれども、南京大虐殺について、歴史家としてどういうお考えをもっていますか、と聞かれたんです。私は、テレビ放映されるので、簡単には答えられないんですが、どんなに学者が誠実に一生懸命やっても、南京大虐殺の事実を、現代の状況で、中国人も日本人も含めて全員が納得するということに至らないだろう、と言ったんです。それではどうしたら全員が納得できるとこへいくのかと言うから、日本と中国が同じ方向で生きる、つまり、社会、国家の方向が同一の方向になって、同じ方向で生きようと思った時には、そのような問題は多分問題として消えるだろう。しかし、そうでない限りは、学問的真理はそんな客観的なものじゃないんです。客観的だと主張している人はいるけれども、それは一方的な主張に過ぎないのであって、決して今のままで、完全な真理に達する道は無い、というように答えたんです。今でも私はそう考えているわけです。どういふことかと言うと、測定術とか因果関係が明らかになったということは大変なこと、中世において因果関係というものを、客観的には捉えてなかったから、当然、様々な自然観、つまり、占星術とか、そのようなものによって決めてたんです。

そこで、我々は自分の周囲を見直す必要があるわけです。私たちは何かの因果関係というものを、合理的な手段で測っているのかということ。近代学問というものを身につけても、大学で勉強しても、そうならないところがあ

る。例えばどういうことかと言うと、マラソンの放送を見ますと、私は不思議でしようがないことがあるんです。ゴール前の一キロ、二キロのところ、何人か選手が競っているとします。その時にアナウンサーが、どのような結果が待ち受けているのか、それは今のところ誰にもまだわかりません、と言うんです。これはどういうことかと言うと、もう結果は出ている、と思っているわけです。つまりゴールに着いた時に、その個人の努力によって結果が出るのではなくて、この三人か四人が争っている中で、誰が勝つかはもう決まっています。ただそれが人間には分からないだけだ、というところがありありと見える考え方をしているんです。要するに日本人は因果関係というものを、その程度に考えている。つまり、なんらかのかたちで、偶然とか、あるいは天命みたいなのが決まっている、と考えているように思えるわけです。そうでないということを、証明することは日本人の場合難しいと思います。ほとんどがそういう意味での、呪術的とか、魔術的とか、そのようなものによって規定されているのが、日本人の因果関係なんです。例えば、歴史とは何か、ということをお問うとします。NHKのディレクターは、歴史は止まっていると考えているらしいんです。だから、NHKの番組に、『その時歴史が動いた』というのがあるんです。「その時動いた」ということは、他の時は動いてないということ、そして日野富子の話なんかがでてくるんです。これを誰も疑問に思わない。この番組は長いことやっているらしいのですが、何も疑問に思わず視て、あれは面白い番組です、なんて言っているんです。これをヨーロッパに持って行ったり、アメリカに持って行ったりしたら、皆びっくりしてしまいうわけです。向こうではそんな題名があり得るということが、そもそも信じられないことなのです。

そして、自然科学が、まず因果関係とは何かを捉えることによって、初めて生まれてくるということになる。ついでに余計なことを言いますと、もう亡くなりりましたが、ユクスキユールという人がいました。このユクスキユールという学者が、『生物から見た世界』という本を書いているんです。お読みになった方もいると思いますが、岩波文庫の一つ星の小さな本です。しかし、これは大変な本なんです。大変な本というのは、一九三三年に出た本であるのに、

今私が読んでも、驚くほど新鮮なんです。この翻訳者は日高敏隆という人です。彼は今、京都あたりにいるんですが、この人は有名な学者で、彼が僕に送ってくれたんです。彼は日本の世間というものを解明する時に役に立つという意味で、私にこの本を送ってくれたと思うんです。このユクスキユールという人の一番面白いのは、環境という概念を使わないということなんです。今は環境が悪化したとか大騒ぎしてますね。そのような環境などというのつべらした概念は使わない。そうではなく、環世界と言っている。環世界とはどういう言葉かと言うと、つまり、ここに蝶が一匹いるとします。その蝶が、世界をどう見ているかと言うと、その蝶が見ている世界はこの程度のもので、この中だけを見ている。同じように他の蝶も自分の環世界をもっている。そして、その環世界の中ですべてが解決している。環境というただ広いものじゃなく、環世界というものがあると言っているんです。これはドイツ語を訳しているんです。ドイツ語でウムヴェルト (Umwelt) というのは、周りの世界、環境と訳すんです。環境と訳すのですが、環境と言うと、なんとなく地球環境とか、地球に優しいとか、非常に曖昧で、わけのわからないことがたくさんあります。しかし、地球をこれだけ破壊してきた人間が、地球に優しいなんてことがあり得ようがないわけです。人間の存在そのものが地球を破壊しているわけですから、地球に優しいなんていう技術を人間が開発できるはずもないのに、そういうことを言っている。例えば我々は、今ここで自分が生きているという主体ということと、環境と言われているものとの関係についてはあまり考えず、近代学問の成果だけを持っている。だから皆さんはおそらく、自分は死んでも長く続いてきたからこの真宗学会は存続するだろうし、さらに同じような講師が話をしているかもしれない、と思っているかもしれない。しかしですね、もしユクスキユールの言うことをきくとすれば、その通りだとすれば、自分が死んだ瞬間に、この世界そのものはなくなる。この世界そのものが幻想になっっている、というふうに捉えられるのです。

わかりやすい例を一つ挙げますと、ダニがいる。このダニは、十四年間木の上で待っている。十四年という長い年

月です。そして、その下を哺乳類が通ると、そこから酪酸が放出されて、それを感知した何らかの器官が動いて、自分それは眠っているのだと思いますが、そのダニはパツンと木の枝から離れて落っこちるんです。そして哺乳類の背中に落ちた途端に後はもう、本能のままにと言いますか、肉に食いついて血をうんと吸う。そうするとそのダニは死んでしまう。しかし、その時は子どもをたくさん産んでますから、そのダニの子どもは地面に落ちて、また木に登って十四年待つ。時間が違うんです。そこで彼は環境とは言わないんですが、それぞれの動物がみんな自分の環境をもっていると言っています。こんな話をしているとは本題に入れなくなってしまうのですが、この自分の環境というのは不思議で、面白いからちょっと紹介しているわけです。また例えば、雀の巢に、雀の声の音しか出せない蛇を送り込んでやると雀は歓迎する。大歓迎して、子どもはみんな喰われてしまう。つまりその雀は、音にだけ反応しているんであって、目で見てないということなんです。あるいは、鶏の場合も、自分のひよこが鳴いているのを、聞けばさっと飛んでいく、助けようとする。しかし、そのひよこの上にガラスの缶を被せてしまうと、丸見えなのに、鳴いても音が聞こえないから飛んでいかない。要するに目で見てなくて、音だけに反応しているということなんです。そういう動物はたくさんいます。

しかし、人間はそう簡単ではないです。耳にも目にも、いろいろと反応があるわけです。日高さんは、日本の世間をこういう環境の観念で解明できるんじゃないかという暗示をかけてくるんですが、そう簡単ではない。そこでもっと大事なのは、時間とか空間という概念も、個人が主体性をもって生きる時に初めて生まれると言っていることです。我々は時間や空間がすでにあつて、そこに産み落とされると考えている。それは近代的学問の、結果そうなったんであつて、それ以前には、自分が生きているということが、どういうことなのかなんて考える人は存在しなかったわけです。中世の人々がもし考えたとすれば、自分が生きていることと、この宇宙の全部とは繋がっていると思ひ、自分が死んだ後の世界というものは考えられなかった、と思います。しかし、今の我々はそうではなく、自分が死んでも

この世界は相変わらず続いていくと思つてゐる。これは我々が近代的自然科学の影響をものに受けていて、そこから一步もはみ出ることができないということです。しかし、それをはみ出さなければ、本当の学問はできないという話なんです。つまり、人文諸科学も、自然科学の影響を受けて、客観的真理が大事だと言われた。それ以後学問は事実の学問になつていく。事実だけ明らかにすればいいということになつていくんです。先ほどの話を伺えば、もちろん大谷大学ではそういうことはないんですが、近代的学問というものはそのような、はつきりと二つの区別する世界をなしているわけです。つまり、客観的、理念的な世界が普遍的世界であつて、そこでこそ真理が解明されているという前提がある。そのために個々の世界は、ものの世界に従属されている。つまり、個々の世界というものは、客観的な世界に従属しているというように、ガリレオ、デカルト以後、ヨーロッパではそうなつてゐる。したがつて、ヨーロッパの近代的学問というものはそのような意味をもつてゐる。今、我々もそれに蝕まれてゐると言つてもいいんです。生活は便利になつてきてますが、生き方の根本問題が近代科学によつて規定されてゐるということはそういうことなんです。自然科学のもとで我々は暮らしてゐますから、当然生活は便利になつてゐます。こういう近代的制度なくしてはもう生きていけないかに見えるほどです。しかし、ここで踏みとどまつて考える必要があるわけです。つまり、はたして近代的な科学の發展は、人々に幸せをもたらしたかという観点から、考へてみる必要があるんです。

人間は傲慢ですから、石器時代と比べてみると、石器時代はいかにも貧しくて、ナイフもフォークも無くて、手づかみで野菜を食べてゐる。そして、肉は生を食べたり、かじつたりしてゐる、と想像をたくましくして、石器時代は貧しい貧しいと皆思つてゐるんです。『石器時代の経済学』という本をお読みになるとわかりますが、幸福というのは、そのように外面的に規定されるもんじゃありません。つまり、幸福の根底には心の落ち着き、安定があるわけですが、石器時代の人々は今よりもはるかに安定してゐた。例えば、日本の統計を見ますと、ストレスが一番少ないのは沖縄の南方諸島。沖縄本島ではなくて、台湾に近いところにある島も含めての島々です。ここはものすごくスト

レスが少ない。ところが東京とか京都とかの大都市に住んでいればストレスが多い。ストレス性の病気も、たくさん増えてきている。例えば、先進国のアメリカという国がある。この国が先進国であることは皆が認めている。そして、日本も一応その先進国に入っているわけです。そのアメリカは、湾岸戦争を始めとして、イラクを攻撃し、向こうの民を殺戮している。過去の戦争、つまり満州事変とか、第一次大戦とかならば、皆そのように言ってはばからないんですが、現在やっているアメリカの戦争については、アメリカに遠慮してかどうか知りませんが、そうは言わないんです。例えば、六カ国協議で、アメリカは北朝鮮に、正確には人民共和国ですが、核兵器どころではなく、核の平和利用も認めないと言っているんです。私は新聞にも書きましたが、それを言う前に、アメリカが核装備を全部廃棄するべきです。これが前提であって、そうではなくしてよその国にだけやめろという。そして、日本政府も何も文句を言わない。これは非常におかしな話です。もつともそのようなことをたくさん書くと、アメリカに入学できなくなるらしいんです。そんなケチな根性もあって、ビザが取れなくなってしまうという人もいます。実際には、イラクで殺戮しているのはアメリカなんです。ナチスと比較するとアメリカ人は嫌がりますが、今アメリカ人で兵士で死んだ人はもう、一万余千にのぼっていますし、イラク人はもうその何十倍も死んでいる。そして、アフガンだつて未だにまったく安定していない状態です。世界一豊かな国と言われるアメリカも、ハリケーンの被害が明らかになってきたならば、貧しい人々が大変な数で被害に遭っていて、しかも救援の手が未だに届かない。また、中国も先進国になった。しかし、ここでも貧しい人々がたくさんいる。つまり先進国という概念を、再検討する必要があると思うんです。科学技術の先進国というだけの意味なんです。これまで先進国という概念は、近代科学を確立した国家のこと、または民主主義の国とも言われていた。しかし、民主主義の先進国であるアメリカで、黒人を始めとする貧困層がどういう位置にいるのが今度のハリケーンで明らかになった。例えば、日本とアメリカを比べてみると、保険は、日本人は全員加入ですから、はるかに日本のほうが恵まれている。このことをアメリカ人は認めなければならない。つまり、

子どもを産む時でも、あるいは色んな時でも皆保険に加入している。確かにわずかな金額で、暮らしていくには足りない金額ですが、しかし、アメリカのように自分で保険を買わなくてはならない国とは違う。近代科学は人間に幸せをもたらすかという、このような問いにはもう答えははっきりしている。もたらさないってことははっきりしているんです。

人間の幸せとは何かという問題には、そう簡単に結論は出せませんが、幸せが人間の生活にあることは確かです。これまでの学問は私たちの生活をきちんと捉えていなかった。そこでフツサルというドイツの学者は、生活世界という言葉を使っているわけです。彼はこれまでのヨーロッパの学問が生活世界を十分に捉えていなかったと、言っているわけです。近代科学が解明しようとしてきたのは、客観的世界ですが、物理学の世界にしても、工芸技術の世界にしても、その実態は論理的に把握しうるだけで、手や目で触れることはできない。しかし、生活世界は手で感じるができる。我々が毎日の生活を振り返るとします。朝起きて朝食をとり、仕事に出かけ、夜帰ってくるその間には様々な出来事があるわけです。例えば、高度な科学技術に関わっている人もいるだろうし、一見そういうことと無縁な仕事に就いている人もいると思うんです。しかし、農業だって最近はずいぶん機械が入っていますし、価格は市場で決められている。漁業だって、魚群探知機によって、漁場が求められていて、価格も農業と同じく市場で決められている。今年はキャベツが採れすぎた、だから当然価格が値崩れするから、廃棄しているんです。しかし、キャベツは捨てられるが、サンマは捨てることのできないから、サンマは「全さんま」という組合がありまして、価格を維持、調整するために出漁制限をしている。毎日のように出漁できないという状況になってきている。これには近代技術、科学が関わっているという事は明らかです。サンマがあるのに捕りにいけない。一方、中にはサンマが買えない人もまだいるという状況です。このような状況でも、三度の食事や睡眠、娯楽や人間関係の基本は変わっていないわけです。男女が結婚して子どもをつくり、そして子孫代々続いていくという基本も変わっていない。

人間が生物である限りは、そのような関係は変わらずに続いていくと思いますが、最近そのことが忘れられて、人間がこの世界の中心であるという考えが生まれてきた。つまり、人間は、昆虫や動植物とは違う、という考え方がかなりでてきていると思うんです。日本はまだいいんです、そこまできかないから。日本では、動物や植物に対する関心が公的な放送の中でもまだ大きいわけです。例えば、桜前線はどこまで来たかという地図があるわけですが、ヨーロッパではあんなもの出はしないし、出たこともない。もちろん動物のニュースもほとんど出ません。日本ではカモが子どもを産み、よちよちと歩く子どもを連れていることがニュースになったりする。海岸がコンクリートで固められてしまつて、ウミガメが産卵できなくてうろろうろしている状況を、ニュースに撮っていたりします。また、熊が最近人里近くに下りてきて殺されたりしている。こういう問題は誰でもみんな知っているわけです。

どうしてこういうことになったのか、ということを考えてみると、日本がヨーロッパ文明を明治以降受け入れてきたことに決定的な原因がある。どうしてかと言うと、ヨーロッパ文明はキリスト教の影響を強く受けているからです。そのキリスト教が人間を世界の中心として位置づけていて、あらゆる動物の頂点に立つものとしているからです。日本の昔話には浦島太郎のように、亀を助けたお礼に竜宮城へ行くという話があるんです。『日本霊異記』には、そういう種の話がいっぱい収録されていますが、動物だけじゃないんです。植物も人間を助けたりする。例えば、鍋物に不可欠な牡蠣、その牡蠣を人から買い取つて海にかえた人が、後で船に乗っている時に海賊に襲われて、海に落とされる。ところが自分の体が浮いているんです。気がついたら法師が五十人ほど体を支えてくれていた。その法師が、自分はあなたに助けてもらった牡蠣です、お返しにあなたの命を助けた、と言つたという話が『日本霊異記』にあります。そんな話は日本にはいくらでもあります。しかし、ヨーロッパにはそんな話は皆無です。ゼロと言つてもいいと思います。つまり、人間と動物が共存する世界というのが、かつてはあつたんですが、その世界が、今では日本でも消えつつあるわけです。そして、人間と動物が共存する世界がヨーロッパにはもともと無い。このヨーロッパ



バの特徴はこれまでも多少は知られていましたが、あまり知られていないんです。特にヨーロッパの歴史学という学問の特色は、自然を排除したところに歴史があるということなんです。これはヘーゲルも、あるいはブルクハルトも皆言っています。人間が自然状態の中にある時には歴史は無い、自然を捨てて、文明化した生活になった時に歴史が始まる。したがって歴史というのは、文明化した人間の生活を描くことだと、このようにはっきりと言ってるんです。日本の歴史学者は明治以降、これを金科玉条として、ヨーロッパの歴史学の伝統を受け継いで、日本の過去も研究している。したがって、ヨーロッパの尺度で日本の過去も研究しようとしていますから、日本の過去の、自然と人間の交流などということは、近代歴史学に一切出てこないんです。例えば、明治以降書かれた日本の歴史学の、近代史の部分を見てみるとわかりますが、近代社会の中で動物や植物がどうなったかなんて、一箇所も書いてないと思います。それだけではないんです。ついでに言いますと、明治十七年に、個人という言葉が日本語になったんです。それ以前は日本には個人という言葉は無かった。個人がいなかったと言ってもいいんですが、個人がいけないわけじゃないです。人間はアメーバではないから、繋がって産まれてきたりはしない。しかし、明治十七年の時にインディヴィデュアル (individual) という言葉の翻訳をして、個人という言葉をつくった時に、初めてヨーロッパの個人という言葉が生まれたんです。明治十年には、社会という言葉がソサイエティー (society) の訳語として生まれたんです。その後、日本の近代が始まったんです。ですから私は色々な疑問を持っているんですが、日本の個人というのは、ヨーロッパの個人とは違うということなんです。

どうしてかと言うと、ヨーロッパの個人は十二世紀に生まれたんです。十二世紀にどのように生まれたかと言いますと、大変難しい問題があるんですが、簡単に言いますと、一つは告白です。内面を告白する。カトリックの教義で一番大事なのは、告解という、コンフェッション (confession) なんです。つまり、司祭の前で自分の罪を、全部白状するんです。そして、それについて罰を与えられるわけです。その罰は昔は厳しかったです。ガレー船に乗って

二年間籠もる。これは死の宣告と同じなんです。ガレー船に二年なんかいられない、みんな死んでしまいます。あるいは、一年間の巡礼の旅に出る。中世の巡礼というのは死を覚悟して行くわけですから、これも死に近い罰なんです。その告白することで、初めて自分の内面を発見するわけです。内面の告白によって、内面を発見することによって初めて個人が生まれる。こうして個人はヨーロッパで生まれた。これは、ちょうど都市が成立したということもあって、そういう条件が成立していた。つまり農村で産まれれば、農民の後を継ぐわけです。しかし、二男、三男になると継がなくてもいい、というより継げないわけですから、都市へ出て行って、手工業の徒弟として暮らすような生活をする。そしてそこで受け入れてもらえる。このようにして個人が生まれるんです。この個人というものは、生まれたらやっかいなものです。個人というのは、自分の考え方を、神様と対話して正当化してもらおうということなんです。つまり、アダムとイヴが生まれた時、『新約聖書』の第一章の最後に、禁断の木の実を食べたアダムとイヴは、こうして我々（神）と同じ存在になったと書いてあるんです。つまり、禁断の木の実を食べて、アダムとイヴは神になった、そう言ってもいいんです。そう書いてあるんです。つまり、禁断の木の実を食べることによって、認識をするようになった。物事を認識するようになれば、神様と同じだと言うんです。こうしてヨーロッパの個人というものが生まれると、国家や社会は非常に困るわけで、最初は弾圧したわけです。数世紀に渡って弾圧が加えられて、個人というものは生きていけないくらい厳しい状況にありながら、頑張って商業で身を立てることができるようになって、十八世紀くらいになってようやく、人権という概念を作り出した。しかも、人権宣言までして、個人が生きていく保証を得た。

日本はそれをただ受け入れたに過ぎない。そして日本の個人というのは、日本の世間という枠組みの中に安住している。つまり、世間と闘わない個人を作ったわけです。世間と闘わない、世間の言いなりになっている個人というものが作られたから、政府は安心して、今でも個人という言葉を平気で使っているわけです。ヨーロッパでは個人が生

まれてから、八百年ぐらいかかつてようやく支配的な地位を得たわけです。ところが、日本の場合は、明治維新の時に近代的な技術は受け入れたけれども、学問という形で受け入れ、人間関係だけは受け入れなかったんです。つまり、親と子の関係、夫婦関係、主従関係は、日本古来のままです。それが「世間」というもので、これは明治どころか非常に古いのです。「世間」はもともとサンスクリットの言葉からきているもので、本来、「破壊されなきゃならないもの」というような意味なんです。しかし、それが色んな形で意味を変えてきて、日本では、「世間」という言葉は、「古事記」の冒頭にもすでに出てきます。丸山眞男という人は、『歴史意識の古層』という論文を書いている。これはとんでもない論文なんです。丸山先生という人は偉い人らしくて、誰も反論を書いていない。私はおかしいなと思つて、この前、反論を書きました。その論文がまだ出ない。丸山先生の著作集を出している出版社で、しかも百枚もある論文なんて出しにくいということがあるでしょうけど、未だに出ない。そのことは主ではないんです。要するに、丸山先生は、『古事記』の冒頭の文句の中から、いくつかの言葉を取りだしてきて、そこで日本人の歴史認識がこの頃に決まってしまったと言っているんです。『古事記』の冒頭の文章です。決まってしまうている、後はそれを要は引き継いできただけだと言ってるんです。同じ『古事記』の冒頭に「世間」という言葉があるのに、それを全く無視して、「世間」というものを無視して今日まできている。私は丸山先生とは全然逆に、「世間」の側から、遡つていって『古事記』に到達して、日本人の歴史意識が、常にさっき言った歴史が止まっているというように停滞的で、しかも繰り返す、進化がない、ということをして、「世間」の側の論理から説明したわけです。今日はその話は致しません。そのようなものが「世間」なんです。世間虚仮という言葉はすでもう日本では聖徳太子のころからあるわけです。

その「世間」中にあるものを三つだけ挙げておきますと、一つは贈与・互酬関係。贈与・互酬というのは、みなさんの知っているとおおり、もらったらかえすという関係です。今日おごつたから、次は君がおごつてくれる、というよ

うに暗黙の了解がある。もらったらかえすという、招待したら招待しかえす、これは世界的に普遍的な原則です。それからもう一つは長幼の序。これは世界的に普遍的ではありませんが、日本では相変わらずそうです。年長者を尊敬する。これは逆に言うと、年長者が威張るという関係でもあって、対等な関係ではなくなってしまうという面もある。さらに共通の時間意識というものがある。これはどういふことかと言うと、日本人は初対面の時には、「今後ともよろしく願います」と言います。これは英語にもフランス語にもドイツ語にもありません。アメリカ人やヨーロッパ人はそういう言葉が無いから、そういう挨拶をしないんです、あるいは、「先日有難うございました」。こういう言葉も無い。そういう言い方をしないんです。つまり彼らは何かしてもらったお礼はその時に言うんです。それでお願いします。遡ってお礼を言うことは絶対にしません。だからそういう言葉が無いんです。日本人が「今後ともよろしく願います」という時に深い意味は無いんですが、同じ「世間」の中に生きているから、また会うことがあるでしょう、その時には私のことも考えて下さい、という意味なんです。いわばお礼の先払いなんですが、そういう発想がヨーロッパ、アメリカ人には無い。これは大変面白い現象なんです。

私はそれを発見して、そのことも書いています。アメリカ人、ヨーロッパ人の場合は、個人というものが自分の時間を生きているんです。赤ん坊ですら両親と一緒にではなく、自分の時間を生きている。私がドイツで暮らした時、夜八時から招待されたことがあります。そうすると赤ん坊は置いて行かなきゃならない。その時にベビーシッターを雇うんですが、これも雇えるのに条件がいろいろありまして、これもなかなか面白いんです。日本には無いと思うんですが、ただ見ているだけというベビーシッター、これが一番安いんです。見ているだけという中身はあまり詳しく調べていませんが、あるいは、本を読んであげる、おむつを代える、起きたら相手する、というように五段階ぐらいに分かれています、最後に必ず終わってから私を自分の家まで送っていくことがついている。これは最初からついているんですが、とにかく五段階ぐらいある。そういう人を雇っていくしかない。つまり、赤ん坊だって常に両親と

一緒ではない自分の時間を生きている。例えば、ヨーロッパの赤ん坊は、昼日中でも日陰のところに乳母車を放って置いてある。わんわん泣いている。道を通る人は誰も絶対覗いてあやしたりしません。私たちは気になってちよっと覗いてみようとするんですが、ほっといってくれと言われるから手を出さない。聞いてみると、我々は、つまりドイツ人は、こうして子どもの時から孤独を学ぶんだなんて大人は言ってます。要するに、彼らはおむつを一日に三回か四回しか代えない、いちいち代えたら大変だということがあるんでしょう、そのような人々なのです。その細かい話は致しません、そのような「世間」というものが、日本人の場合、ヨーロッパ人とは全然違うということです。つまり、「世間」の中にヨーロッパ的な個人はいないんです。ヨーロッパ的な個人とはどういう個人かと言うと、自分もし間違いがあつた場合、自分の周囲に何か問題があつた場合は、抗議するという姿勢です。

私の知っている人に現実起こつた話ですが、私の行っている病院で、手の血管が詰まつてしまつて、赤黒くなつて腫れ上がつていた人がいました。それで先生が、その先生は若い女医なんですが、家族全部呼べと言うので、家族全員が来た。そして左手は手首から切断しなきゃならない、と言われてみんな動揺してしまつたわけです。本当に困つて、愕然としたわけです。その時にたまたま、その病院の副院長が通りかかつて、その手を診て、何ともないよ全然問題ないと言つた。そうしたら、その女の先生が、あなた運がいいわね、〇〇先生が通りかかつてくれて、と言つてそれで済んでしまつた。私だつたら訴えるところです。家族全部呼び集められて、腕を切断するということを宣告されて、具体的な日にちまで決められて、それなのに他の先生が通りかかつてちよつと診て、何ともないよと言われるらそれで終わってしまうのか、と訴えます。ところが、その患者は絶対訴えたりしません。我々に愚痴をこぼすだけなんです。何故かという、相手が権力者だからです。つまり、権力者ということとは医者だから、何かすれば後でいじめられる。それが怖いから何もせずに黙っている。これは日本人の特徴というか、「世間」の中で生きていく人間の知恵なんです。自分の希望さえ知らせない、このような状況のなかに生きている、これが日本人なんです。この

生活をずっと長く生きてきていて、そこでその「世間」の中にいかに生きるべきかという問題が残っているわけです。それを少しお話するわけですが、みなさんは大人の人が大半ですから、「世間」の中での苦労というのは、みんな知っているといます。みんなそれなりに生きています。ですから、今更私が「世間」の中で如何に生きるべきかなんていうことを言う必要ないと思うんです。

鬼海弘雄という写真家があります。この人は『PERSONA』（ペルソナ）という写真集を出しています。この本には浅草で撮った人達が載っています。この人達を見ると皆すごいです。非常に個性豊かな人が写っているんです。私はその本の評みたいなのを書いたことがあるんですが、日本人はみんな個性的なんですよ。でも、「世間」の中では個性的な生き方ができないでいる。そこで、今日は私は、自分の最近の仕事をしたいのですが、最近あまり講演をしないので、今私は何を考えているかということだけは最後に少しお話しておきたいと思うんです。どうということかと言いますと、「世間」の中で生きていくために、どういう道があるかということなんです。このことについて私なりに結論が出た、と思うんです。それはたいしたことじゃないです。簡単なことなんです。これは色々な人が言ってますが、具体的なことを聞きますと、必ずしも皆同じではない。

例えば、親鸞は『教行信証』の中でこういうことを言っている。

世間道を転じて出世上道に入るものなり。「世間道」をすなわちこれ「凡夫所行の道」と名づく。転じて「休息」と名づく。凡夫道は究竟して涅槃に至ることあたわず、常に生死に往来す。これを「凡夫道」と名づく。

（聖典一六二頁）

これはある意味では「世間」の中での生き方です。人間の生き方というものを書いてあるわけでは、そこからどうしたらいいのかということになると、あまり書いてないんですが、一つあるんです。それはどうということかと言うと、同じ巻に、

仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しき  
がごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。  
(聖典一六五頁)

とあります。つまり、「世間」の道を旅に喩えている。親鸞は世間の中で具体的にどういう行動をすべきかを論じて  
いないんですが、今引用した言葉に、そのすべてが集約されていると思うんです。易行としてますが、これはもちろ  
ん、念仏のことを言ってるわけで、菩薩の道を言っている。さらに、もう一つ具体的に暗示しているのは、

『菩薩戒経』に言わく、出家の人の法は、国王に向かいて礼拝せず、父母に向かいて礼拝せず、六親に務えず、  
鬼神を礼せず  
(聖典二八七頁)

この部分です。つまり、天皇に礼拝しない、父母に礼拝しない、鬼神につかえない、これは「世間」の中の、呪術  
を信じないということなんです。この場合の呪術についての詳しいことは、ここではお話しできませんが、今まで日  
本で呪術というと、マルセル・モースの書物が基本になっている。私はそれは間違いだと思っています。これはすでに教  
学研究所で話をした時に説明しましたが、親鸞の言っている呪術というのは、マルセル・モースの呪術とは違うとい  
うことだけは言っておきたいと思います。

最後に、これは私の研究分野から、日本ではほとんど紹介されていない本なので、紹介しておきたいと思ひます。  
私は生涯の最後にやりたい仕事があつて、それはエラスムスについてなんです。これは旅人としてこの世を生きてい  
く心構えというのが、世の東西を問わずに共通していることを示すために挙げるんです。エラスムスという人  
は、一五〇四年に、『キリスト教戦士必携』という本を出しています、キリスト教戦士というのは騎士のことで、こ  
れは普通の人のことです。その人が絶対持っていないといけないハンドブックということなんです。これはキリスト教信者  
としての心構えを説いているんですが、その中にこういう一節があるんです。

福音の深慮を享受しているキリスト教信者の生活の中に、むなししいものが、どうして入り込むのであろう。つまり

世俗の生活、世間の中にむなししいものがいっぱいある。生活のすべてはなんという騒がしさに満ちていることだろう。取引をしたり、航海、船に乗って航海したり、戦ったり、協定を結んだり、それを破ったり、結婚して子どもを作ったり、相続人を定めて土地を買っては、それを売ったり、友好関係を結んで、建物を建てては壊し、頭を剃り、油を注がれ、これは洗礼の一つです。頭巾を頂く、これは僧侶の階層です。様々な芸を身につけ、大変な苦勞をして、法学や神学の博士号をとる、司教の冠や司教の杖を手にするものもある。このような思いによって私たちの心は、苦しめられ、老いていく。こうして時を無為に過ごしているうちに、かけがえない貴重なものを失ってしまう。最後の裁きがおこなわれ、真なるもののみがそれに耐えうるだろう。こういう出来事すべては仮のものに過ぎない。したがって自分の一生を夢のごとき、妄想のうちに浪費してしまったことに気づく時に、すべては手遅れとなっている。誰かが、キリスト教信者はこういうむなししいものに関わるべきではないと言うかも知れない。こういうことを言う人はいったいいいます。つまり、この世の出来事はむなししいから、法学博士の学位をとろうとか、神学博士の学位をとろうとか、あるいはお金を儲けようとか、建物を建てようとか、そういうことはみんなむなししい。こう言う人はいったいいいます。しかし、彼はそうは言わないんです。そうではなく、たとえそれらに関わるとしても、ただ一つの貴重なもののために、すべてを軽々と棄てる覚悟ができていなければならないのである、と言うんです。これが言いたいことなんです。

パウロも次のように言っています。妻がある者はない者のように。泣く者は泣かない者のように。喜ぶ者は喜ばない者のように。買うものは持たない者のように。世と交渉がある者はそれに深入りしないようにすべきである。なぜならこの世の有様は過ぎ去るからである。それゆえにこの世と交渉をもつても、それを楽しんでほならない。

これは『コリント前書』なんです、パウロのこの文章は大変有名な文章です。要するに、現世の出来事というものはむなししいということは前提にあるわけだけでも、それと関わらないで我々の一生は無い。しかし、そこにすが



りついてしまって、夢中になってしまわない。要するに、それが自分の精神と、あるいは心とぶつかることがあったら、全部棄ててしまわなければいけない。全部棄てる覚悟ができてなければいけない、ということなんです。これは簡単なようで、難しいことです。今の日本の世間の状況、政治家達の行動を見ると、これができている人はほとんどいないように思います。しかし、それができていないと一生が非常に苦しい、おそらく最後まで修羅場になると思っています。しかし、そのいざとなれば全部棄ててもいいという覚悟ができている旅人の心境、世間を旅人として渡るといふ心境が身に付けば、身に付くと言っても、これは一度見に付けばおしまいということではないから、常に闘いですが、そういう中で初めて、キリスト教徒として生きることができると言っているんです。

私は、それは親鸞とも共通するところがあると思います。そう言うところとエラスムスと違うとか色々異論があるでしょう。エラスムスという人は、生涯自分の故郷に帰れなかった人、つまり一定の土地に住めなかった人なんです。つまり、彼が何かを発表すると、必ず教皇や皇帝や伯爵達の怒りに触れたりする。しかし、彼はインテリで、ものを書いて暮らしてるわけですから、その人たちが、客になってくれなければならぬ。その人たちの引きがなければ暮らしていけない。したがって転々として、生涯旅の中で暮らしたんです。もちろん結婚なんかしなかった。旅の中で生涯を暮らして、その中でこれを書いている。ですから、彼がもう一つ皆さんご存じの、『痴愚神札養』という本を書いて、ここでローマ教皇なんかを、徹底してからかっているわけです。日本にはこういう人はいないんです。日本で天皇でもいいですが、からかった人は一人もいない。からかえば殺される可能性が高かったからです。今だってそうなんです。今だってそれに近い。実際、戦後でも、天皇の首がころりなんていう小説書いた人は、それ以後ほとんど隠遁して暮らしていた。今だってそういう状況です。そういう状況の中で安んじて暮らす。安んじてということはないですが、信念という言葉は嫌いなので、あんまり使いたくないんですが、少なくとも自分の心が侵された時には、全部棄ててしまう。このような教えは、若い人にはあんまり勧められないんです。若い人に勧めてもできない、実践で

きないと思うんです。ですから、若い人はやはり「世間」の中にまみれて暮らせばいいと思います。そして、その中で盛んに苦勞すればいいと思うんです。問題は六十歳以上になった人で、この人達はもうそろそろ世間道にまみれるんじゃないかと、どこかで全部投げ棄ててやろうと思えば良いと思うんです。そう思えば、違った生き方ができるんじゃないかなと思います。最後は口幅つたいことを申し上げました。これで学問とは何かということの本質というよりも、「世間」の中での生き方についてお話したわけです。どうも失礼しました。

（本稿は、二〇〇五年・〇月一八日の真宗学会大会での講演記録に加筆・訂正を行ったものである。）